

原著

## 親のソーシャルスキルと養育態度が大学生の内的作業モデルを介してソーシャルスキルに与える影響

小野夏月\*<sup>1</sup> 福岡欣治\*<sup>2</sup> 中村有里\*<sup>2</sup>

### 要 約

本研究では、親のソーシャルスキルと子どものソーシャルスキルの関係を検討した。子どもによって知覚された親の養育態度と子ども自身の内的作業モデルが媒介変数として測定された。参加者は地方の一大学において授業時に募集された。調査は無記名でおこなわれ、大学生とその母親69組のデータが記入不備なく収集された。大学生は知覚された養育態度、内的作業モデル、ソーシャルスキルの質問に回答し、授業時に調査票を提出した。母親は自身のソーシャルスキルについて回答し、郵送で調査票を提出した。母親と子どものソーシャルスキルの尺度は、それぞれコミュニケーションスキルと対人スキルの内容からなっていた。知覚された養育態度は、養護と過保護の2尺度からなるParental Bonding Instrumentにより測定された。内的作業モデルの尺度はアタッチメント不安とアタッチメント回避の2側面を含むものであった。相関分析の結果、コミュニケーションスキルと対人スキルの相関は非常に高かった。構造方程式モデリングの結果、母親のソーシャルスキルから子どものソーシャルスキルへの影響は、知覚された養育態度と内的作業モデルを介した間接的なものと、これらを介さない直接的なものの両方が認められた。これらの結果は、母親のソーシャルスキルが子どものソーシャルスキルの基礎にあること、その影響は養育態度と内的作業モデルを介したものと直接のもの両方があることを示唆している。

### 1. 緒言

#### 1.1 対人関係の問題とその背景としてのソーシャルスキル

従来より、自己不確実感や不全感を持ち、友人・教員とのコミュニケーションを適切におこなえず、大学生活への適応に大きな困難を抱える大学生の存在やその増加が指摘されている<sup>1)</sup>。他方、対人関係の希薄化やコミュニケーション不全の要因として、対人関係を円滑に進める能力であるソーシャルスキル<sup>†1)</sup>の欠如が挙げられている<sup>2)</sup>。ソーシャルスキルとは、相川<sup>3)</sup>によれば「対人関係における自らの目標達成をめざして、相手に適切かつ効果的に反応するために用いられる言語的・非言語的な対人反応」であり、定義として、円滑な対人関係の獲得・維持に寄与するという性質をもつ。なお、ソーシャルスキルは多様な内容を含むが、「記号化」「解説」など

のコミュニケーションスキルないし基本スキル（基礎スキル）と、「関係開始」「関係調整」などの対人場面での具体的な行動を表す対人スキルないし応用的スキル（特定スキル）の両方を含み、前者のスキルを基盤として後者のスキルが発揮されると考えられている<sup>47)</sup>。

ソーシャルスキルと適応ないし不適応との関連は、多くの先行研究で報告されている。たとえば相川ら<sup>8)</sup>は、大学生を対象とした調査により、ソーシャルスキルの不足は抑うつ、孤独感、対人不安の原因になり得ることを指摘している。戸ヶ崎と坂野<sup>9)</sup>は、関係向上行動のソーシャルスキルを多く獲得している児童にはクラスメイトから人気のある児童が多く、孤独児が少なかったことを報告している。また、丹波と山際<sup>10)</sup>は、ソーシャルスキルの乏しい児童では学校において友人関係でより強いストレスを生じ

\*1 (元)川崎医療福祉大学大学院 医療福祉学研究科 臨床心理学専攻 (現在の所属：公益財団法人慈圭会慈圭病院)

\*2 川崎医療福祉大学 医療福祉学部 臨床心理学科

(連絡先) 福岡欣治 〒701-0193 倉敷市松島288 川崎医療福祉大学

E-mail: fukuoka@mw.kawasaki-m.ac.jp

ていることを示唆している。適切なソーシャルスキルの獲得は、このような不適応を防ぐために有効であると考えられる。

### 1.2 ソーシャルスキルの獲得における親の養育態度の役割

ソーシャルスキルはどのようにして獲得されるのであろうか。ソーシャルスキルは学習性のものであり<sup>3)</sup>、その獲得メカニズムは、「言語的教示」、「オペラント条件づけ」、「モデリング」、「リハーサル」という4つの原理から構成されると考えられている<sup>11)</sup>。「言語的教示」は他者からの教示、「オペラント条件づけ」は自らの対人行動の結果、「モデリング」は他者の第三者への行動の観察、「リハーサル」は繰り返し思い出すことによる学習である。前二者は他者との直接的な関わり、後二者は間接的な関わりによるものと言える。いずれにせよ、このような学習の機会には身近な他者との関係によって得られるものである。

本研究では、このような身近な他者として、特に養育者としての親の役割に注目する。子どもが生まれて初めて強い絆を形成するのは親であり、社会化の最初の担い手となる<sup>12)</sup>。発達とともに子どもの対人関係は養育者を中心とする家族関係から友人その他との関係へと拡大していくが、アタッチメント対象としての親との関係は安全な避難所および安心の基地として作用し<sup>13)</sup>、子どもの積極的な社会的行動の基盤となる。また、心理的離乳の時期とされる青年期においても、親との情緒的な結びつきは一定程度維持され、その重要性を失うわけではない<sup>14)</sup>。

先行研究は、青年期を含むさまざまな年齢層の子どもにおいて、ソーシャルスキルの獲得に親の養育態度が影響することを示している。養育態度とは、親が子どもを育てるにあたって、意図的あるいは無意図的にとる一般的な態度および行動のことである<sup>15)</sup>。親による自己報告とともに子どもによる認知（養育態度認知）として把握され、その内容はしばしば「愛情（受容-拒否）」と「統制（干渉-放任）」の2次元で測定される<sup>16)</sup>。なお、その代表的な測度の1つに「養護(Care)」と「過保護(Overprotection)」の2因子からなる Parental Bonding Instrument (PBI)<sup>17)</sup>がある。

養育態度と子どもの発達との関連については数多くの報告があるが、ソーシャルスキルへの影響に関する国内での研究例として、たとえば戸ヶ崎と坂野<sup>9)</sup>は、小学生を対象として、母親の養育態度が拒否的であると子どもが認知している場合に、子どものソーシャルスキルの獲得が妨げられることを報告している。肥後橋<sup>18)</sup>は、母親の養育態度の「情緒的

支持」の傾向が強いほど、子どもの「配慮のスキル」や「思いやりのスキル」の獲得が多いことを明らかにしている。また、青木ら<sup>19)</sup>は、中学生を対象に、異性の親の拒否的傾向が強いと、友達に乱暴な話し方をしたり、邪魔をしたり、欠点や失敗をよく言ったりして友人関係を維持しにくい傾向がみられることを報告している。

### 1.3 親の養育態度と子どものソーシャルスキルの媒介変数としての内的作業モデル

親の養育態度は子どものソーシャルスキルに影響を与えると考えられるが、両者の関連性は、直接的なものだけとは限らない。近年の研究では、内的作業モデル (Internal Working Model) が、親の養育態度と子どものソーシャルスキルを媒介する内的要因として取り上げられてきた。内的作業モデルは、アタッチメント理論の中で Bowlby<sup>20)</sup> が提唱した概念である。Bowlby<sup>20)</sup> によれば内的作業モデルとは、アタッチメント対象との具体的な経験の中で形成された対象への接近可能性や、対象の情緒的応答性等に関する表象モデル、および自分の他者への働きかけの有効性に関する表象モデルである。アタッチメント理論に従えば、子どもはこれを一種の人間関係のテンプレートとして用い、結果として、主要なアタッチメント対象との間で経験したのと類似の関係を、多くの他者との間に持つことになる<sup>13)</sup>。なお、アタッチメントについては母子分離場面での観察にもとづく3類型(回避型、安定型、アンビバレント型)<sup>21)</sup>がよく知られており、児童期以降成人期についても当初は同様の類型的アプローチによる測定が提案された<sup>22)</sup>。ただしその後の様々な検討を経て、現在ではアタッチメント対象に見捨てられるかも知れないという「不安」と親しい関係を避けようとする「回避」の二次元が採用されている<sup>23,24)</sup>。

内的作業モデルを養育態度とソーシャルスキルないしそれに近い変数との関係を媒介する要因として扱った日本での先行研究として、大鷹ら<sup>12)</sup>、島<sup>25)</sup>、中川<sup>26)</sup>がある。たとえば大鷹ら<sup>12)</sup>は、中学生と大学生を対象として、子どもにより認知された母親の養育態度と子ども自身の内的作業モデル、ソーシャルスキルの相互関係を検討した。そして、母親の望ましくない養育態度（「過保護・期待」「拒否・厳格」）が内的作業モデル「安定」傾向に負の影響、「回避」「アンビバレント」傾向に正の影響を及ぼし、内的作業モデルが「安定」傾向であると子どものソーシャルスキルに正の影響、「回避」「アンビバレント」傾向であると子どものソーシャルスキルに負の影響を与えていたことを報告している。また島<sup>25)</sup>は、大学生を対象として、親の養育態度に対する否定的な

評価（「養護」<sup>†2)</sup>が低く「過保護」が高い）が不安定な内的作業モデル（「不安」や「回避」が高い）につながり、その結果として社会的な適応が困難になる（自尊感情が低く、自己閉鎖的で傷つけられることを回避する）というモデルが成立することを報告している。この研究はソーシャルスキルを直接には扱っていないが、円滑な友人関係の形成にとってソーシャルスキルが重要であることは従来から繰り返し指摘されており<sup>3,8-10)</sup>、内的作業モデルの媒介的影響を示唆する先行研究の一つとして位置づけることができると考えられる。そして中川<sup>26)</sup>は、中学生を対象として、子どもが認知する養育態度が子どもの内的作業モデルに影響を与え、内的作業モデルがソーシャルスキルに影響を与えると仮定した因果モデルの妥当性について検討した。そして、受容的な養育態度が子どもの内的作業モデルの「回避」「アンビバレント」傾向を抑制し、「安定」傾向を促進させ、安定傾向の内的作業モデルがソーシャルスキル（他者への配慮やかかわりのスキル）の獲得に正の影響を与えていたことを報告している。

#### 1.4 子どものソーシャルスキルの基盤としての親のソーシャルスキル

以上のように、先行研究からは、子どもの対人的適応を支えるソーシャルスキルは、親の養育態度から、とりわけ子どもの内的作業モデルを介した形で影響を受けていることが指摘できる。しかしながら、本研究ではこれにとどまらず、親のソーシャルスキルにも着目する。

まず、本研究では、子どものソーシャルスキル獲得における養育者としての親の影響は、親の養育態度を起点とするものだけではないと考える。なぜなら、ソーシャルスキルの学習という観点からみた場合、親は子どもにとってモデリングの対象であり、また具体的な行動について教示し得る存在でもありと考えられるからである。子どもは親が第三者に対しておこなう行動から学び、また他者に対してどのように振る舞うべきか直接に指示されることもある。これらはソーシャルスキルの学習におけるモデリングと言語的教示に対応すると考えられる。このことから、養育者としての親のソーシャルスキルが、子どものソーシャルスキルに対して直接的な影響を及ぼすという影響関係が想定される。

加えて、親のソーシャルスキルは、親の養育態度に影響を与える要因としても想定し得る。たとえば渡辺<sup>27)</sup>は、親として子どもにかかわる際にソーシャルスキルの考え方が重要であると述べ、親自身が基本となるソーシャルスキルを身につける必要があることを指摘している。そして、子どもが他者と適切

にコミュニケーションできるようになるために、親がソーシャルスキルを子どもに少しずつ伝えていく必要があるという。また、小野ら<sup>28)</sup>はこの考え方を背景に、母親自身の回答によるソーシャルスキルが子どもである大学生の評価による母親の養育態度に与える影響について検討している。そして、構造方程式モデリングによる分析の結果、母親のソーシャルスキルが、優しさや温かみを感じられる養育態度、子どもの意思を尊重する養育態度と関連することを報告している。

なお、親のソーシャルスキルへの着目は、臨床的介入および予防の観点からみても意義のあることと考えられる。その理由は、1つには子どものソーシャルスキル不足が考えられる場合の支援では、本人の行動変容だけでなく子どもを支える家族や環境への介入が重要である<sup>29)</sup>と考えられることである。親のソーシャルスキルはそのための介入ターゲットになり得る。もう1つは、ソーシャルスキルが養育態度の基盤であるとするならば、親になる以前からのソーシャルスキルの獲得が、将来の不適切な養育を防ぐことにつながると考えられることである。ソーシャルスキルが学習により獲得されることを前提に、親のソーシャルスキルへの着目は、子どものソーシャルスキルの獲得あるいはその不足による問題に対して、短期的にも長期的にも有意義な視点であり得ると考える。

#### 1.5 本研究の視点と目的

本研究では、対人的適応の基盤としての子どものソーシャルスキルを支える、身近な親の果たす役割に注目する。従来から、親の養育態度は子どものソーシャルスキルに影響することが指摘されている。そして、親の養育態度と子どものソーシャルスキルの関係に、子どもの内的作業モデルが介在していることが報告されている。本研究でもこれらの知見に従い、親の養育態度が子どもの内的作業モデルを介してソーシャルスキルを左右する、という影響関係を取り扱う。

さらに本研究では、渡辺<sup>27)</sup>および小野ら<sup>28)</sup>と共通する視点として、親のソーシャルスキルが果たす役割に着目する。親のソーシャルスキルは親の養育態度を左右することによって、子どもの内的作業モデルを介して子どものソーシャルスキルに影響すると考える。さらに本研究では上記に加え、親のソーシャルスキルは、学習によるその形成プロセスの観点から、養育態度と内的作業モデルを介さない形でも子どものソーシャルスキルと関連する可能性があると考えられる。

以上の考察にもとづき、本研究では、親のソー

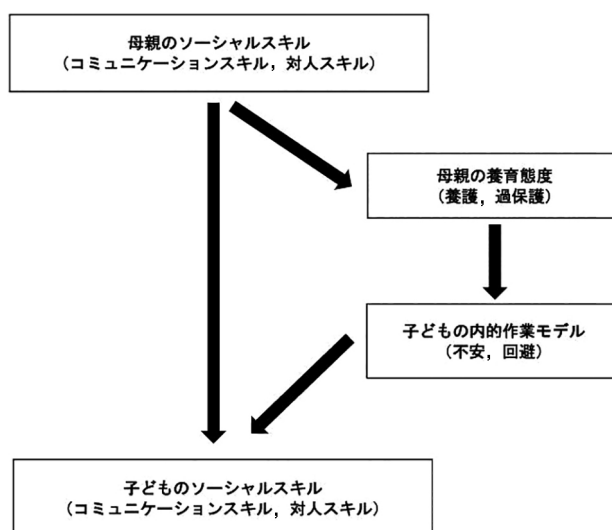


図1 親のソーシャルスキルと養育態度、子どもの内的作業モデルとソーシャルスキルの間に予想される基本的な関連性

シャルスキルと養育態度、子どもの内的作業モデルとソーシャルスキルの間に、図1のような基本的な変数間の関連性を仮定する。すなわち、親の養育態度は子どもの内的作業モデルを介してソーシャルスキルに影響し、加えて、親のソーシャルスキルが養育態度に影響するとともに、子どものソーシャルスキルに対して養育態度や内的作業モデルを介さない直接の影響を及ぼすと考える。このような変数間の影響関係を、小野ら<sup>28)</sup>と同じく大学生とその親を対象にして検証することが本研究の目的である。

## 2. 方法

### 2.1 調査対象者

大学生348名とその保護者（「あなたのことを最も面倒をみてくれた人」）を対象に調査をおこない、79組から回答を得た。未回答や回答に明らかな矛盾があるものを除く73組について保護者の内訳を確認したところ、母親69名、父親3名、祖母1名であった。そのため分析対象の等質性を考慮し母親を挙げた69組のデータを分析対象とすることにした。大学生69名（男性11名、女性58名）の平均年齢は19.46歳（SD=1.08）、保護者の平均年齢は49.25歳（SD=3.59）であった。

### 2.2 測定内容

#### 2.2.1 ソーシャルスキル

相川と藤田<sup>4)</sup>の尺度を使用し、大学生と保護者の双方に回答を求めた。コミュニケーションスキルと対人スキルの両方を測定できるよう意図して作成された尺度である。コミュニケーションスキルの側面

として、相手の意思を正確に受け取る「解説」、相手に自らの意思を正確に伝える「記号化」、対人場面において個人内に生じる感情に対処する「感情統制」の3因子、対人スキルの側面として、初対面の人と会ったときに適切な対応を取る「関係開始」、対人関係を適切に維持する「関係維持」、相手の意思を尊重しつつ自分の意思を抑えることなく伝える「主張性」の3因子を含む。回答方法は原版と同じく「ほとんどあてはまらない(1)」～「かなりあてはまる(4)」の4件法を用いた。大学生には現在の状態について、保護者には子どもが中学生頃までの状況を回答するよう教示した。後者は次項に記す養育態度の測定に合わせたものであった。

#### 2.2.2 子どもの評価による親の養育態度

Parker et al.<sup>17)</sup>によるPBIの日本版<sup>30)</sup>を用い、大学生に対し自分の保護者の養育態度について回答を求めた。子どもが親の優しさや温かみを感じられる養育態度である「養護」と、子どもを操作しようとすることや自立を妨害しようとする養育態度である「過保護」の2因子計25項目で構成されている。回答方法は、小川<sup>30)</sup>と同じく「あてはまらない(1)」～「あてはまる(4)」の4件法を用いた。回答の際には「あなたが16歳までの間で、自分のことを最も面倒をみてくれた人」を、「母親、父親、祖母、祖父、その他」の中から1人選択してもらい、その人を思い浮かべて回答してもらった。なお、このうち「16歳までの間」としたのは原版に沿った教示であり、他は本研究の回答者が家庭の状況にかかわらず回答可能になるよう考慮して独自に設定した。

### 2.2.3 子どもの内的作業モデル

中尾ら<sup>31)</sup>の尺度(児童版 ECR-RS<sup>†3)</sup>)を使用し、大学生に回答を求めた。使用の際、原著者自身の見解(表現を適宜変更可能)にもとづき、本研究では「おうちの人」を「人」(一般他者)におきかえて調査をおこなった。アタッチメントの2次元モデル<sup>32)</sup>にもとづく測定が可能であり、アタッチメント対象に見捨てられるかもしれない不安の「アタッチメント不安」と、頼ったり頼られたりする親しい関係を回避する「アタッチメント回避」の2因子からなる9項目で尺度が構成されている(以下では「不安」「回避」と表記する)。中尾ら<sup>31)</sup>と同様に「あてはまらない(1点)」～「あてはまる(4点)」の4件法で回答を求めた。なお、この尺度は児童版と称されているが、成人用の日本版 ECR-RS<sup>33)</sup>を平易な表現に改めて作成されており尺度の意味内容は同一であること、より少ない項目数で測定できること、オリジナルの ECR-RS<sup>34)</sup>を用いた最近の研究で10-18歳を対象にその有用性について同意が得られつつあるとされていること<sup>31)</sup>から、大学生を対象とする本研究でも適用可能であると判断した。

### 2.2.4 個人属性

回答者の個人属性として、大学生については年齢と性別、保護者については年齢と子どもとの続柄をたずねた。

### 2.3 手続き

大学の授業前後に(授業に支障のないよう開始前または終了後の時間を利用して)学生用の調査票と依頼状、保護者用の調査票等一式(依頼状・調査票・提出用封筒)を一括して配付した。配付の際、本調査の目的、協力は任意であること、同意しない場合

も当該科目の成績に否定的な影響が及ばないこと、同意後も回答の中断が可能であることを口頭と文書で説明した。協力が得られた学生には、その場で学生用の調査票に回答してもらった(退室時に回答の有無にかかわらず提出)。保護者用は「あなたのことを最も面倒をみてくれた人」に回答してもらうものとし、郵送での提出を書面で依頼した。なお、直接保護者に調査票を渡すことができない学生には、保護者に送付するための封筒と切手を配付した。

### 2.4 倫理的配慮

調査への協力は自由意思にもとづき、回答しなくても一切の不利益がないこと、結果は統計的に処理し個人が特定されることはないこと、質問紙およびデータの管理は厳重におこなうこと、答えたくない場合は白紙のまま提出してよいことを口頭で説明した。質問紙にも同様の内容を記載し、研究者に質問紙が返送されたことをもって同意とみなした。実施に先立ち、著者の所属大学における倫理委員会の承認を得た(承認番号19-058)。

## 3. 結果

### 3.1 尺度の信頼性と記述統計量

親子のソーシャルスキル、養育態度、内的作業モデルのそれぞれについて尺度の信頼性(内的整合性)を確認するため、Cronbachの $\alpha$ 係数を算出した。その結果をそれぞれの平均値、標準偏差とともに表1に示す。なお、ソーシャルスキルについては相川と藤田<sup>4)</sup>の因子分析にもとづく下位尺度(コミュニケーションスキル、対人スキルの各3因子)別にも算出したが、母親では「関係維持」、子どもでは「感情統制」「関係維持」において信頼性係数が低かつ

表1 各指標の信頼性係数と記述統計量

回答者	変数と下位尺度	$\alpha$ 係数	平均値	標準偏差
親	親のソーシャルスキル			
	コミュニケーションスキル	0.79	43.42	5.83
	対人スキル	0.89	47.91	8.33
	ソーシャルスキル全体	0.91	91.33	12.96
子ども	養育態度			
	養護	0.83	28.68	5.28
	過保護	0.79	10.26	5.59
	内的作業モデル			
	アタッチメント不安	0.85	7.51	2.82
	アタッチメント回避	0.78	13.38	3.46
	子どものソーシャルスキル			
	コミュニケーションスキル	0.75	44.19	5.85
	対人スキル	0.91	48.44	9.35
	ソーシャルスキル全体	0.91	92.62	13.98

た(順に0.65, 0.68, 0.33)。これらの構成項目数がいずれも4項目と少ないこと, 相川と藤田<sup>4)</sup>でも「関係維持」の $\alpha$ 係数は0.6台であったこと考慮し, 本研究では親子それぞれ「コミュニケーションスキル」と「対人スキル」を構成する項目群で下位尺度を構成し, 両者を合わせた「ソーシャルスキル全体」での得点とともに検討することとした。その結果, 養育態度の「養護」「過保護」, 内的作業モデルの「不安」「回避」を含めいずれも0.75以上の $\alpha$ 係数が得られ, 使用に耐えるものと判断した。なお, ソーシャルスキルについては母親, 子どもの両方で, 「コミュニケーションスキル」「対人スキル」に分けた場合よりも「ソーシャルスキル全体」で検討した場合に $\alpha$ 係数が高くなる傾向がみられた。

なお, これらの尺度得点に関して子どもの性別による違いがないかどうかをt検定により確認したが, いずれも有意差は認められなかった。

### 3.2 尺度間の相関関係

母親および子どものソーシャルスキル(「コミュニケーションスキル」「対人スキル」および「ソーシャルスキル全体」と養育態度(「養護」「過保護」), 子どもの内的作業モデル(「不安」「回避」)の間でピアソンの相関係数を算出した(表2)。それぞれの下位尺度間では, ソーシャルスキルの「コミュニケーションスキル」と「対人スキル」では親子の両方で高い正の相関が認められた。養育態度の「養護」と「過保護」の間には負の相関がみられた。内的作業モデルの「不安」と「回避」の間には有意な相関が認められなかった。

母親のソーシャルスキルのうち, 「コミュニケー

ションスキル」は養育態度の2尺度と有意な相関(「養護」とは正, 「過保護」とは負)が認められた。「対人スキル」における相関はそれより低く, 「過保護」との10%水準での負の相関が認められたに留まっていた。「ソーシャルスキル全体」は「養護」と10%水準(符号は正), 「過保護」と5%水準(符号は負)での相関であった。また, 母親のソーシャルスキルは子どもの内的作業モデルとは有意な相関が認められなかった。しかし, 子どものソーシャルスキルとは相関が認められ, 特に母親の「コミュニケーションスキル」は子どもの「コミュニケーションスキル」および「対人スキル」と同程度の有意な正の相関が認められた。母親の「対人スキル」はそれより若干低く, 子どもの「コミュニケーションスキル」とは10%水準, 「対人スキル」とは5%水準での相関であった。「ソーシャルスキル全体」も母親-子ども間で有意な正の相関が認められた。

母親の養育態度は, 「養護」「過保護」とともに子どもの内的作業モデルにおける「不安」と有意に関連していた(前者は負, 後者は正の相関)。また, 内的作業モデルの「回避」ともそれよりは弱いものの有意ないし有意傾向の相関がみられた(同様に, 前者は負, 後者は正の相関)。また, 子どものソーシャルスキルとの相関も有意ないし有意傾向で認められ, 「養護」は「コミュニケーションスキル」「対人スキル」「ソーシャルスキル全体」とそれぞれ正, 「過保護」はこれらと負の相関がみられた。子どもの内的作業モデルとソーシャルスキルの間にはいずれも負の有意な相関が認められた。

表2 指標間の相関係数

変数と下位尺度	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨
親のソーシャルスキル									
コミュニケーションスキル	①	1							
対人スキル	②	.66 ***	1						
ソーシャルスキル全体	③	.88 ***	.94 ***	1					
養育態度									
養護	④	.25 *	.18	.23 †	1				
過保護	⑤	-.32 **	-.23 †	-.29 *	-.56 ***	1			
内的作業モデル									
アタッチメント不安	⑥	-.05	-.03	-.04	-.35 **	.41 ***	1		
アタッチメント回避	⑦	-.16	-.19	-.19	-.28 *	.21 †	.11	1	
子どものソーシャルスキル									
コミュニケーションスキル	⑧	.35 **	.22 †	.30 *	.24 †	-.29 *	-.30 *	-.27 *	1
対人スキル	⑨	.37 **	.25 *	.33 **	.21 †	-.27 *	-.34 **	-.45 ***	.67 ***
ソーシャルスキル全体	⑩	.39 ***	.26 *	.35 **	.24 *	-.30 *	-.35 **	-.41 ***	.87 ***
								.87 ***	.95 ***

\*\*\* $p < .001$ , \*\* $p < .01$ , \* $p < .05$ , † $p < .10$

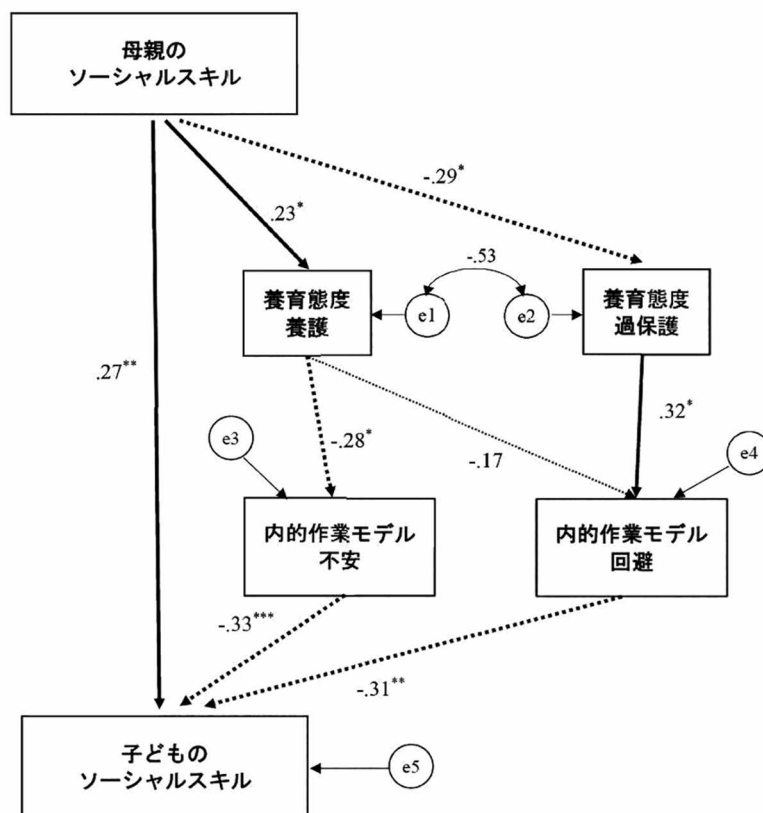
### 3.3 構造方程式モデリングによる変数間の関連性

親のソーシャルスキルと養育態度、そして子どもの内的作業モデル、子どものソーシャルスキルの関係を全体としてみた場合、親のソーシャルスキルは養育態度ならびに子どものソーシャルスキルと関連していた。親の養育態度は子どもの内的作業モデルとより強い関連が認められ、そして子どもの内的作業モデルとソーシャルスキルの間にも有意な関連性が認められた。このことは、図1に示した変数間の直接および間接的な関連性を検討する前提条件が満たされていることを意味する。

そこで、親のソーシャルスキルが養育態度を介して子どもの内的作業モデルに影響すること、子どもの内的作業モデルが子どものソーシャルスキルに影響すること、そして親のソーシャルスキルから子どものソーシャルスキルへの直接的な（養育態度や内的作業モデルを介さない）影響関係も認められることを仮定した構造方程式モデリングによるパス解析をおこなった。分析には Amos 24 を使用した。なお、ソーシャルスキルの「コミュニケーションスキル」と「対人スキル」について

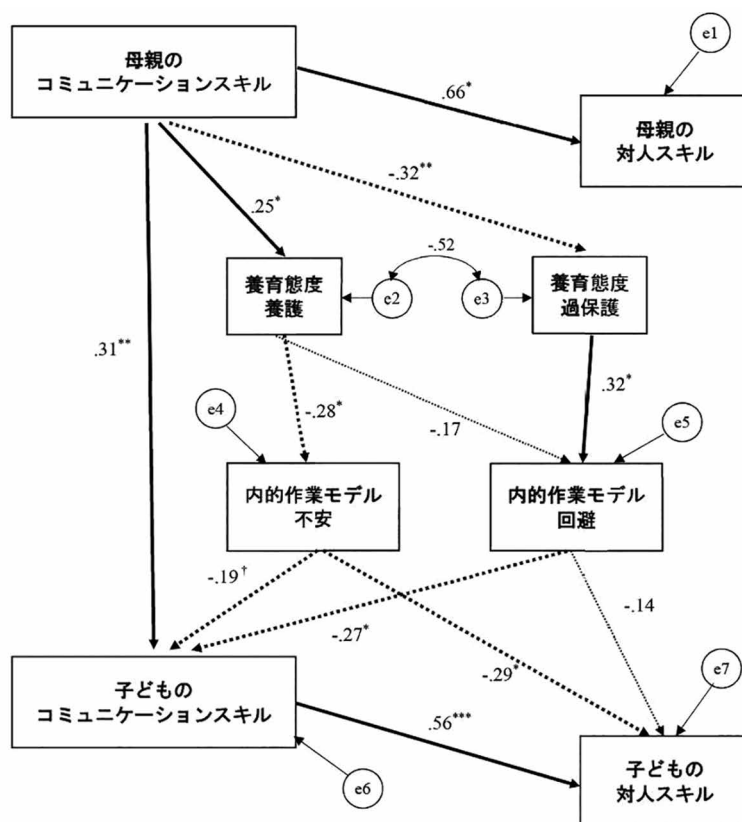
は、前者が後者の基礎にあることを想定したモデルと、両者間での高い相関、信頼性係数の高さ、およびサンプルサイズによる予測変数の数の制限<sup>35)</sup>を考慮して「ソーシャルスキル全体」を用いたモデルの2通りで分析し、各種の適合度指標を確認しながらモデルの妥当性を検討した。その結果、いずれも解釈可能な変数間の関連性が確認され、モデルの適合度もおおむね同様であったが、若干後の方がより良好な値を示した（前者では  $\chi^2(15) = 6.762$  ( $p = .964$ ), GFI = .976, AGFI = .943, RMSEA = .000, CFI = 1.000, AIC = 48.762, 後者では  $\chi^2(6) = 2.523$  ( $p = .866$ ), GFI = .988, AGFI = .958, RMSEA = .000, CFI = 1.000, AIC = 32.523; GFI, AGFI は大きい方が、AIC は小さい方が、統計的には良いモデルである)。

図2aに示すとおり、ソーシャルスキルを全体でみたモデルでは、ソーシャルスキルが養育態度の「養護」に正、「過保護」に負の影響を与えており、前者は内的作業モデルの「不安」に負、後者は「回避」に正の影響を与えていた。そして、内的作業モデルは「不安」「回避」のいずれも子どものソーシャル



実線は正の影響、破線は負の影響を示す。\*\*\* $p < .001$  \*\* $p < .01$  \* $p < .05$ .

図2 a 親のソーシャルスキルから養育態度、内的作業モデルを介した子どものソーシャルスキルへのパス図。ソーシャルスキルは全体での得点を使用。



実線は正の影響、破線は負の影響を示す。\*\*\* $p < .001$  \*\* $p < .01$  \* $p < .05$  † $p < .10$ .

図2b 親のソーシャルスキルから養育態度、内的作業モデルを介した子どものソーシャルスキルへのパス図。コミュニケーションスキルと対人スキルの階層構造を仮定。

スキルに負の影響を与えており、内的作業モデルが養育態度と子どものソーシャルスキルの関係を媒介していた。そして、それらの影響関係とは別に、親のソーシャルスキルは養育態度や内的作業モデルを介さず、子どものソーシャルスキルに直接の影響も及ぼしていた。

図2bに示すとおり、ソーシャルスキルを「コミュニケーションスキル」と「対人スキル」に分けて両者の間に影響関係を仮定した場合、親の養育態度と子どもの内的作業モデルの関係は先と同様であったが、親のソーシャルスキルで養育態度に影響していたのは「コミュニケーションスキル」のみであり、親の「対人スキル」から他変数への影響は認められなかった。親の「コミュニケーションスキル」は子どもの「コミュニケーションスキル」に対して、養育態度や内的作業モデルを介さない直接の影響関係も有していた。ただし、内的作業モデルの「不安」と「回避」は、子どもの「コミュニケーションスキル」に対して、また内的作業モデルの「不安」は「対人スキル」にも有意な負の影響を与えていた。

#### 4. 考察

##### 4.1 内的作業モデルを介した養育態度から子どものソーシャルスキルへの影響

本研究では、子どもの対人的適応を支える要因としてのソーシャルスキルに対して身近な親の果たす役割に着目し、まず従来の研究にもとづき親の養育態度が子どもの内的作業モデルを介してソーシャルスキルに影響すると想定した。本研究の結果は基本的にこの考え方を支持するものであったといえる。養育態度は子どもの内的作業モデルに影響を及ぼし、内的作業モデルは子どものソーシャルスキルに影響を及ぼしていた。養育態度からソーシャルスキルへの影響は、内的作業モデルを介した間接的なものであった。具体的には、図2aにみられるように、養育態度の「養護」は内的作業モデルの「不安」を低め、子どものソーシャルスキルを高めることにつながっていた。これに対して養育態度の「過保護」は、とくに内的作業モデルの「回避」を高めることによって、子どものソーシャルスキルを低めることにつながっていた。また、図2bにみられるように、子どもの内的作業モデルは「不安」「回避」のいずれも「コ



コミュニケーションスキル」を低め、また「不安」は「対人スキル」にも有意な負の影響を及ぼしていた。親の養育態度が内的作業モデルを介してソーシャルスキルに影響するという変数間の関連性は、先行研究<sup>12,25,26)</sup>と基本的に共通するものである。不安定で否定的な内的作業モデルを表す「不安」や「回避」は積極的な対人行動を妨げるように働くと考えられるが、その場合、結果として様々なソーシャルスキルを高める機会を減少させることになる。本研究の結果はこのような影響を反映しているものと解釈される。

ただし、細かくみると、養育態度と内的作業モデルの関係は、とくに島<sup>25)</sup>とは異なる結果であった。島<sup>25)</sup>およびその直接の先行研究である金政<sup>36)</sup>は、養育態度を本研究と同じくPBIの日本語訳(※ただし本研究とは異なる邦訳版が用いられている)で測定し、「養護」が「回避」に、「過保護」が「不安」に影響していたことを報告している。これらの研究と本研究とでは内的作業モデルの尺度も同一ではないため(両研究では中尾と加藤<sup>37)</sup>のECR邦訳版から項目を抜粋して使用している)、本研究との相違の一部は測定方法に依る可能性がある(たとえば島<sup>25)</sup>における養育態度2尺度の相関は $r=-.64$ と本研究よりやや高く、内的作業モデル2尺度の相関は $r=.31$ で明らかに高い)。また、島<sup>25)</sup>は養育態度の「養護」と内的作業モデルの「回避」、同じく「過保護」と「不安」の関連をそれぞれBowlby<sup>38)</sup>の安全な避難所(safe haven: 危機に直面した時に親に保護を求める)と安全基地(secure base: 親を拠点として外界を探索する)に対応するものと解釈しているが、親が過保護であると親以外の関係に対して回避的になり親の養護が乏しいと親以外の関係に対しても不安を持つことも考えられ、実際に相関係数のレベルでは「養護」「過保護」はともに「不安」「回避」と同程度に関連している。ただし本研究のサンプル数は少なく内的作業モデルも相対的に少ない項目数で測定しており、本研究の知見が頑健であると主張することはできない。今後の追試的検討が必要である。

#### 4.2 親のソーシャルスキルから子どものソーシャルスキルへの媒介的および直接的影響

本研究ではさらに、親のソーシャルスキルが養育態度の基盤であるとともに、スキルの学習性という観点から子どもに対して養育態度を介さない形での影響もあり得るものと考えて検討をおこなった。図2aに示したとおり、ソーシャルスキル全体での得点を用いた分析からは、本研究の基本的な仮定をよく反映する結果が導かれた。すなわち、ソーシャル

スキルは子どもの評価する親の養育態度の2次元にいずれも有意な影響を与えており、すでに述べたとおりそれらが内的作業モデルの2次元にそれぞれ影響を与えることによって、最終的には子どものソーシャルスキルに影響を及ぼしていた。加えて、親のソーシャルスキルは養育態度や内的作業モデルを介さず直接に子どものソーシャルスキルにも影響を与えていた。すなわち、これらの結果は、親のソーシャルスキルが高いほど、「養護」が高く「過保護」が低いという適切な養育態度が子どもに認知されることで内的作業モデルも安定的・肯定的なものになり、結果的に高いソーシャルスキルがもたらされること、そして養育態度によるものとは別の直接的な影響によっても子どものソーシャルスキルが高まることを表す。前者の結果は、ソーシャルスキルの高い親が子どもに対しても適切な養育態度で接することができることを意味する。後者については「親が他者と関わること」を観察することによるモデリングや、他者に対してどのような行動をとることが適切かを教えられるなどの言語的教示によって、すなわちソーシャルスキル学習のプロセスが働くことによって、結果として親と同様のスキルを獲得していくことが考えられる。

ソーシャルスキルを「コミュニケーションスキル」と「対人スキル」に分けた場合、図2bに示すとおり、養育態度と関連していたのはコミュニケーションスキルのみであった。対人スキルは、本研究で用いた尺度では、「関係開始」「関係維持」「主張性」からなるとされている。これらは初対面あるいは一定の心理的距離がある人との間で発揮される内容を含むと考えられることから、子どもに対する養育態度と直接の関連がみられなかった可能性がある。他方、コミュニケーションスキルは「解読」「記号化」「感情統制」からなるとされ、これらはあらゆる他者とのコミュニケーションにおいて常に問題となるスキルであると考えられる。そのため、子どもに対する養育態度にも容易に反映され得るのであろう。

ただし、上記の解釈は親の第三者に対する行動を「観察する」ことによって子ども自身が類似の行動をとることができるようになる、というモデリングの解釈とは必ずしも一致しない。モデリングがおこなわれるならば、親の対人スキルについても同様の直接的な関連性が子どもの対人スキルとの間に認められると考えられるからである。この点については、親が対人スキルを発揮する場面が子どもの経験する対人場面と大きく性質を異にするため容易には汎化がなされず、関係の種類や場面の性質を問わず対人関係の円滑さを左右する基本スキルとしてのコミュ

ニケーションスキルの方が相対的に明瞭な影響を有していたためと解釈することができるかもしれない。表2に示した相関分析でも、子どもの対人スキルは親の対人スキルよりもむしろコミュニケーションスキルの方とより強い相関関係を有していた。親の対人スキルと子どもの対人スキルの関連性は、本研究のデータによる限りは強いとは言い難い。

しかしながら、コミュニケーションスキルと対人スキルの相関は高く、それは親だけでなく子どもでも同様であった。図2bの分析結果は、親のコミュニケーションスキルが直接・間接に子どものコミュニケーションスキルに影響を及ぼすことと合わせ、コミュニケーションスキルの高い子どもは対人スキルも高く、その背後に親のコミュニケーションスキルがあることをも表している。従って、子どもの対人スキルに親のソーシャルスキルが影響を及ぼさないという解釈は正当ではない。むしろ、親のコミュニケーションスキルが養育態度や内的作業モデルを媒介して、あるいは直接的に子どものコミュニケーションスキルに影響し、結果として子どもの対人スキルにも影響を及ぼすことが考えられる。

#### 4.3 臨床的な示唆

本研究は、親の養育態度が内的作業モデルを介して子どものソーシャルスキルに影響する、という従来の研究に沿った（ただし細部には相違を含む）知見を提供するとともに、親のソーシャルスキルが養育態度の背景にあること、加えて養育態度を介さない影響も親のソーシャルスキルが子どものソーシャルスキルに対して有していることを指摘するものである。本研究の問題意識の背景には大学生の対人的・社会的適応上の問題があり、その改善のために変容可能な要因としてのソーシャルスキルに着目した。大学生自身のソーシャルスキルの向上・改善はその直接的な方策となるが、本人のみならず身近な関係に対する視点も必要であり<sup>29)</sup>、予防的な観点からも青年期以前の要素に目を向けることは有意義であると考えられる。本研究の結果は、従来明らかにされてきた養育態度だけでなく、介入の焦点としてソーシャルスキルも設定し得ることを示している。

しかし、本研究の結果は、単に介入の焦点を拡大するにとどまらない意味をもつ可能性がある。たとえば、本研究では養育態度を子どもの評価として測定したが、ソーシャルスキルについては母親自身の回答によって情報を得た。母親の回答による自らのソーシャルスキルが子どもの評価する養育態度と関連していたことは、母親の自覚するスキルを向上させることで、子どもが直接に利益を得ることができることを意味する。加えて、養育態度はあくまで子

どもに対するものであるが、ソーシャルスキルは子どもとの関係にとどまらない汎用性をもつ<sup>28)</sup>。親のソーシャルスキルの改善は親自身の幅広い対人的適応を促し、心理的によりよい状態の基盤となることが考えられる。

加えて、親のソーシャルスキルは、親自身が子育てを開始するよりも以前、親になる以前から結果として身につけてきたものである。青年期の「親準備性（親性準備性）」は母性準備性や親になることへの意識の観点から主に検討されているが<sup>39,40)</sup>、子どもの対人的適応を促すという意味において、ソーシャルスキルの獲得がその基盤となり得るという新たな視点も本研究からは示唆される。なお、金政<sup>36)</sup>はアタッチメントの世代間伝達という観点から、母親自身のアタッチメントスタイルを背景とする養育態度が子どものアタッチメントと関連することを報告している。このような知見は発達における親から子への連鎖的影響を強調するものであるが、本研究におけるソーシャルスキルへの着目はそのような影響関係を認めつつ、いかにより良い方向へと変化させられるかという視点をもつ。本研究は介入や予防を直接に扱ってはいないが、子育て中の親に対して、また親になる以前からのソーシャルスキル向上のための取り組みが有意義であり得ることを指摘し、今後の研究の発展可能性を示唆するものである。

#### 4.4 本研究の問題点・改善点

本研究は、最終的な分析対象者数が計69組と非常に少数であった。これは小野ら<sup>28)</sup>とほぼ同様であり同論文でも問題視されていたが、安定した結果を得るためにはより大規模なサンプルを対象とする必要がある。加えて、本研究では大学生を対象に調査票等一式を配布して保護者への回答を依頼したが、回答率の点からサンプルの代表性についても問題が残る可能性がある。

本研究における測定面での大きな問題は、ソーシャルスキルの測定精度が低かったと考えられることである。本研究では、相川と藤田<sup>4)</sup>の作成した尺度を用いた。この尺度はコミュニケーションスキルと対人スキルの両方を含み、より網羅的な性質を有する。しかしながら、同研究の因子分析でも事前の仮定どおりの因子が抽出されたわけではない。そして同研究でも本研究でも一部因子の信頼性は低く、本研究では事後的に「コミュニケーションスキル」「対人スキル」の2つを下位尺度とし、別途「ソーシャルスキル全体」での得点も算出した。構造方程式モデリングの結果はそれぞれ一定の適合度を有していたが、「ソーシャルスキル全体」での分析の方が統

計的に望ましく、かつ明瞭な解釈が可能であった。本研究における「コミュニケーションスキル」と「対人スキル」を区別した結果は暫定的なものであり、今後引き続き検討が必要である。

なお、本研究で測定された親のソーシャルスキルは、子どもが中学生頃までの状態について回答を求めるものであった。本研究では、PBI 日本版で測定される養育態度に合わせ、この測定方法を採用した。しかし、親のソーシャルスキルと養育態度との関連を検討するという観点からは、回想の期間がより短い高校生、あるいはその時点での養育態度により影響を受ける中学生を対象とした方が、より直接的で正確な検討ができる可能性がある。

#### 4.5 結論

本研究では、子どもの対人的適応を支える要因と

してのソーシャルスキルに対して身近な親の果たす役割に着目し、大学生とその母親のペア・データにもとづき、親の養育態度が子どもの内的作業モデルを介してソーシャルスキルに影響することを確認した。加えて、親のソーシャルスキルが養育態度の基盤になるとともに、子どものソーシャルスキルに直接的な影響を及ぼすことを明らかにした。ソーシャルスキルを「コミュニケーションスキル」と「対人スキル」に分けた分析では前者による影響が主に示されたが、測定上の問題から暫定的な結果として扱うべきであると考えられる。親のソーシャルスキルへの注目は、介入のターゲットとして臨床的にも予防的にも有用な視点であると考えられる。

#### 謝 辞

本研究は第一筆者による令和元年度川崎医療福祉大学大学院医療福祉学研究科臨床心理学専攻に提出した修士学位論文にもとづき、そのデータを再分析したものです。ご指導を下さいました先生方、調査の実施にあたり御配慮を下さった皆様、調査票への回答に御協力下さいました大学生ならびに保護者の皆様に、深く感謝申し上げます。また、尺度の使用についてご許可を下さいました先生方にも、改めて御礼申し上げます。

なお、本研究の遂行にあたり、利益相反関係にある企業等はありません。

#### 注

- †1) ソーシャルスキル (social skills) は「社会的スキル」と表記される場合もあるが、相川<sup>14)</sup>にもとづき本稿では「ソーシャルスキル」に統一する。
- †2) この研究ではPBIの「Care」尺度の日本語訳を「ケア」と表記している。
- †3) Experiences in Close Relationships-Relationship Structure Questionnaire の頭文字である。

#### 文 献

- 1) 山田ゆかり, 天野寛: 自画像による大学生の適応性の検討. 名古屋文理大学紀要, 2, 3-12, 2002.
- 2) 橋本剛: 学生における対人ストレスイベントと社会的スキル・対人方略の関連. 教育心理学研究, 48, 94-102, 2000.
- 3) 相川充: 新版人づきあいの技術—ソーシャルスキルの心理学—. 新版, サイエンス社, 東京, 2009.
- 4) 相川充, 藤田正美: 成人用ソーシャルスキル自己評定尺度の構成. 東京学芸大学紀要, 第1部門教育科学, 56, 87-93, 2005.
- 5) 大坊郁夫: 社会的スキル・トレーニングに生かされる言語・非言語コミュニケーションの働き. 電気情報通信学会技術研究報告, 106, 31-36, 2006.
- 6) 大坊郁夫: 社会的スキルの階層的概念. 対人社会心理学研究, 8, 1-6, 2008.
- 7) 藤本学, 大坊郁夫: コミュニケーション・スキルに関する諸因子の階層的構造への統合の試み. パーソナリティ研究, 15, 347-361, 2007.
- 8) 相川充, 藤田正美, 田中健吾: ソーシャルスキル不足と抑うつ・孤独感・対人不安の関連—脆弱性モデルの再検討—. 社会心理学研究, 23, 95-103, 2007.
- 9) 戸ヶ崎泰子, 坂野雄二: 母親の養育態度が小学生の社会的スキルと学校適応におよぼす影響—積極的拒否型の養育態度の観点から—. 教育心理学研究, 45, 173-182, 1997.
- 10) 丹波洋子, 山際勇一郎: 児童・生徒における学校ストレスの査定. 筑波大学心理学研究, 13, 209-218, 1991.
- 11) King CA and Kirschenbaum DS: *Helping young children develop social skills: The social growth program*. Brooks/Cole Publishing Company, Salt Lake City, 1992.
- 12) 大鷹円美, 菅原正和, 熊谷賢: 母子関係と子どものソーシャルスキル発達の阻害要因. 岩手大学教育学部附属教育

- 実践総合センター研究紀要, 8, 119-129, 2009.
- 13) 遠藤利彦: 生涯にわたるアタッチメント. 北川恵, 工藤晋平編著, アタッチメントに基づく評価と支援, 誠信書房, 東京, 2-27, 2017.
  - 14) 池田幸恭: 青年期の親子関係. 高坂康雅, 池田幸恭, 三好昭子編, レクチャー青年心理学—学んでほしい・教えてほしい青年心理学の15のテーマ—, 風間書房, 東京, 79-93, 2017.
  - 15) 川合貞子: 養育態度. 岡田正章, 千羽喜代子他編, 現代保育用語辞典, フレーベル館, 東京, 438, 1997.
  - 16) 福井義一, 鈴木直人: Symonds の養育態度尺度再考—量的尺度化の試み及びその信頼性と妥当性の検討—. 同志社心理, 54, 39-48, 2007.
  - 17) Parker G, Tupling H and Brown LB: A Parental Bonding Instrument. *British Journal of Medical Psychology*, 52, 1-10, 1979.
  - 18) 肥後橋敬子: 母親の養育態度が子供の社会的スキルに及ぼす影響. 和歌山大学教育学部教育実践総合センター紀要, 15, 197-206, 2005.
  - 19) 青木多寿子, 谷口弘一, 竹嶋飛鳥, 戸田真弓: 両親の養育態度が中学生の社会的スキルおよび生活充実感に及ぼす影響. 広島大学大学院教育学研究科紀要第一部. 学習開発関連領域, 57, 27-33, 2008.
  - 20) Bowlby J: *Attachment and loss. Vol.2. Separation: Anxiety and anger*. Basic Books, New York, 1973.
  - 21) Ainsworth MDS, Blehar MC, Waters E and Wall S: *Patterns of attachment: A psychological study of the strange situation*. Lawrence Erlbaum Associates, Hillsdale, 1978.
  - 22) Hazan C and Shaver P: Romantic love conceptualized as an attachment process. *Journal of Personality and Social Psychology*, 52, 511-524, 1987.
  - 23) Crowell JA, Fraley RC and Roisman GI: Measurement of individual differences in adult attachment. In Cassidy J and Shaver PR eds, *Handbook of attachment: Theory, research, and clinical applications*, 3rd ed, Guilford Press, New York, 598-635, 2016.
  - 24) 中尾達馬: 質問紙法. 北川恵, 工藤晋平編著, アタッチメントに基づく評価と支援, 誠信書房, 東京, 117-134, 2017.
  - 25) 島義弘: 親の養育態度の認知は社会的適応にどのように反映されるのか—内的作業モデルの媒介効果—. 発達心理学研究, 25, 260-267, 2014.
  - 26) 中川優子: 中学生が認知する養育者の態度と中学生の内的作業モデルとそのソーシャル・スキルとの関連性. 神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要, 8, 85-92, 2015.
  - 27) 渡辺弥生: 親子のためのソーシャルスキル. サイエンス社, 東京, 2005.
  - 28) 小野夏月, 中村有里, 福岡欣治: 母親のソーシャルスキルと大学生による母親の養育態度の評価との関連. 川崎医療福祉学会誌, 29, 153-160, 2019.
  - 29) 粕谷貴志, 菅原正和, 河村茂雄: 中学生の内的作業モデルとソーシャル・スキルとの関連について. 岩手大学教育学部附属教育実践研究指導センター研究紀要, 10, 91-98, 2000.
  - 30) 小川雅美: PBI (Parental Bonding Instrument) 日本版の信頼性, 妥当性に関する研究. 精神科治療学, 6, 1193-1201, 1991.
  - 31) 中尾達馬, 村上達也, 数井みゆき: 児童期においてアタッチメント不安とアタッチメント回避を測定する試み—児童版 ECR-RS の日本語版作成—. パーソナリティ研究, 27, 179-189, 2019.
  - 32) Fraley RC and Shaver PR: Adult attachment: Theoretical developments, emerging controversies, and unanswered questions. *Review of General Psychology*, 4, 132-154, 2000.
  - 33) 古村健太郎, 村上達也, 戸田弘二: アダルト・アタッチメント・スタイル尺度 (ECR-RS) 日本語版の妥当性評価. 心理学研究, 87, 303-313, 2016.
  - 34) Fraley RC, Heffernan ME, Vicary AM and Brumbaugh CC: The Experiences in Close Relationships-Relationship Structures Questionnaire: A method for assessing attachment orientations across relationships. *Psychological Assessment*, 23, 615-625, 2011.
  - 35) VanVoorhis CW and Morgan BL: Understanding power and rules of thumb for determining sample sizes. *Tutorials in Quantitative Methods for Psychology*, 3, 43-50, 2007.
  - 36) 金政祐司: 青年・成人期の愛着スタイルの世代間伝達—愛着は繰り返されるのか—. 心理学研究, 78, 398-406, 2007.
  - 37) 中尾達馬, 加藤和生: 成人愛着スタイル尺度 (ECR) の日本語版作成の試み. 心理学研究, 75, 154-159, 2004.
  - 38) Bowlby J: *Attachment and loss. Vol.1. Attachment*. Basic Books, New York, 1969.

- 39) 服部律子：親準備性尺度作成のための因子抽出の試み. 思春期学, 26, 428-432, 2008.  
40) 尾花真梨子：親性準備性に関する研究動向と展望. 江戸川大学心理相談センター紀要, 1, 25-29, 2020.  
41) 相川充：人づきあいの技術—社会的スキルの心理学—. サイエンス社, 東京, 2000.

(2021年11月18日受理)

## Effects of Parent's Social Skills and Child-rearing Attitudes on College Students' Social Skills Mediated by Their Internal Working Model

Natsuki ONO, Yoshiharu FUKUOKA and Yuri NAKAMURA

(Accepted Nov. 18, 2021)

**Key words** : social skills, child-rearing attitudes, Internal Working Model, parent-child relationship, university students

### Abstract

The relationship between parental social skills and their college-age children's social skills was investigated by focusing on perceived child-rearing attitudes and children's Internal Working Model as potential mediating variables. Participants with no missing values were 69 pairs of college students and their mothers. The students were recruited voluntarily at the end of classes in a Japanese university and anonymously provided information. The students responded about parents' perceived child-rearing attitudes, internal working models, and social skills and returned the questionnaires in the class. The students' mothers responded about their social skills and returned the questionnaires by mail. Mothers and children responded to the Social Skills Scales assessing communication and interpersonal skills. The Parental Bonding Instrument assessed the perceived child-rearing attitudes to evaluate care and overprotection. Children's Internal Working Model was assessed by the Experiences in Close Relationships-Relationship Structures Questionnaire comprised of two subscales, attachment anxiety, and attachment avoidance. A correlational analysis indicated strong relationships between communication skills and interpersonal skills. Structural equation modeling indicated significant direct and indirect effects of maternal social skills on children's social skills through the mediation of perceived child-rearing attitudes and children's Internal Working Model. These results suggest that maternal social skills form the direct and indirect bases of children's social skills, mediated by perceived maternal child-rearing attitudes and the children's Internal Working Model.

Correspondence to : Yoshiharu FUKUOKA

Department of Clinical Psychology

Faculty of Health and Welfare

Kawasaki University of Medical Welfare

288 Matsushima, Kurashiki, 701-0193, Japan

E-mail : [fukuoka@mw.kawasaki-m.ac.jp](mailto:fukuoka@mw.kawasaki-m.ac.jp)

(Kawasaki Medical Welfare Journal Vol.31, No.2, 2022 381 – 393)